

---

## 「農村自治」総括大会に参加して

大川 健嗣

(一)

村研第一八回大会は、奈良県下多武峰にある多武峰観光ホテルで開催された。十月三、四の二日間で一〇〇人を越す会員が参加し、三年

---

がかりの共通テーマ「農村自治——構造と論理」の総括大会となつた。古川彰、谷口浩司、柄澤行雄の三会員による自由報告があり、次いで関順也「近世村落の推移」、長谷川昭彦「相互扶助慣行と農村自治」、春日文雄「農業危機進展と『むら』構造」、佐藤正「農村自治——構造と論理」の四会員による課題報告を受けて、二日目に討論がなされた。以下、討論の主要な争点または論点のみに限定して若干の感想を述べてみたい。

## 〔一〕

討論は、余田・細谷・東三会員の司会進行により進められた。今大会は、司会者団により「歴史篇」と「問題篇」の二本の柱がたてられ、討論がなされた。

「歴史篇」では、(1)「藩制村に自治はあったか」、(2)「市制町村制施行前の『地方自治』と『農村自治』」の二点に絞って論議された。まず、岩本会員から開報告の「西の村」「東の村」の型論(仮説)に対する批判から討論が開始され、むしろ型論ではなく「段階差」として捉えるべきではないかといつた岩本発言などがあり、それに端を発し、「むら」または「村落」の枠をどう考えるかに議論が発展し、閲会員は、「寄り合い」関係こそが近世「村落」の実体と捉えたいとの考えが示された。それとの関わりで村研の古くて新しい永遠のテーマとも言つべき「共同体」論にも及んだが、この問題に関しては入口でヒターンをしてしまった。

次に開報告において、明治初期の大区小区制に言及され、「大区」

が以後の行政村になつてゐると考へるという報告があつたのに対し、まず菅野正・菅野俊作両会員から、それは事実誤認ではないかとの厳しい指摘がなされ、大区小区制は、本質的には、むしろ明治権力強化策の一環として利用されたもので、この当時の農村自治は国家権力により包摂されてしまつていたのではないか、むしろ「農村自治」らしいものが確認できるとすれば小作争議期になつてからのことなのではないか(菅野正会員)、との積極的見解が示された。ここで高山会員から、この問題に言及する場合、すなわち農民の性格を検討する場合、歴史的・段階的認識を欠いてしまつては議論そのものが不毛な議論になりはしないか、との指摘がなされ、それがある程度受けた形で余田会員から見解が示されたが、基本的には閲会員と同趣旨のものであつたようと思う。高山会員は、なお議論の展開を不満とみて、農民および村と明治国家権力との対抗関係の中で「自治」が語られなければならない。しかもこの「むらの性格」なるものは歴史的に変化するものとして捉えられるべきだ、との指摘がなされた。

## 〔二〕

次に問題篇に移り、ここでは、(1)「地方自治」と「農村自治」——行政と運動——、(2)自治の主体——農民層分解とも関連して——、(3)展望——いま農村・農業・農民に何を展望し、「農村自治」を論ずるか——の三点に絞られた。まず司会の東会員から「研究通信」一一八—一二一号の中から、前述の三点に関連する会員の見解が資

料にもとづき紹介された。

まず、長谷川・春日両会員の見解が共通課題に具体的にどう関わる主張なのか、前日の報告では必ずしも鮮明でなかっただけに、この点の確認（大川）から議論は開始された。この点佐藤正会員の報告は論旨はかなり明快だったようと思う。岩手県志和農協の具体的実践事例を通して、旧村単位を基盤にした志和農協が、有畜複合経営により農家経営を確立しつつ、他方農民会館を農民の「砦」化することにより、国独資本制下における今日的「農村自治」の堡壘を確保し続けているという報告がなされた。討論はこの三会員の報告を中心に展開されたが、部分的にはかなり重要な論点への言及もあつたが、全体的にはもうひとつ突っ込みが足りなかつた感じがある。その原因を考えみると、いずれにしても個別具体的な事例を踏まえた共通課題への議論の一般化ないしは普遍化が、報告者によつて必ずしも明確に提起されずに終つてしまつたところにある、と言わざるを得ない。たとえば、佐藤報告が、今後の日本農業・農村の方向性を探る時にどこまで一般性を持ち得るのか。その際、春日報告の対象地たる稻作单作地帯庄内の場合には、志和農協路線を採り得るのか、あるいはこれとは別途な路線を探らざるを得ないのかといった問題などである。もちろん、総括討論に参加した会員全体の責任でもあったわけであるが。

しかし、一方では、今大会において、農村自治の「主体」との関わりで、戦後における「小農」の性格規定、とりわけ「土地持ち労働者」とは何か。また、佐藤正会員から提起されたところの日本農

業の「アジア的零細性」にもとづく農民的土地所有（論）をめぐる論議など、今後の大会で検討されるべき重要ないくつかの課題が提起された大会でもあつて、それなりに有意義な大会であつたと思われる。

最後になりましたが、今大会開催にあたつてなにかとご尽力願つた奈良女子大学のみなさん、大会事務局の高山会員に対し謝意を表したい。また、今大会司会者団のアイデアで総括討議のために配布された「通信」からの引用資料は大いに有効であつたことを特記し、これについても感謝したい。

（一九八〇・一〇・一〇）